

統合医療新聞 第78号
◆連載 統合医療の揺りかごを探して
旭丘光志
「体の再生・修復能力を発動させる胎盤の力」
吉田健太郎医師
◆開催予告
日本きのこ学会第13回大会

The news of Integrative Medicine 統合医療新聞

第78号

発行所 漢方医薬新聞社 〒135-0047 東京都江東区富岡1-11-5-203 電話 03-3630-6731 FAX03-3643-3431

血栓症に勝つ

驚異のミズパワー・LR末食品

医学博士 須見洋行 監修

四六判並製カバー装 195頁

発行・東洋医学舎 定価1260円(税込)

統合医療におけるがんの予防と治療 東アジアの補完医療の役割と可能性を探る

がん治療

2月17日(金)・18日(土)、東京医科歯科大学M&Dタワー大講堂(文京区)にて、日本統合医療学会主催国際シンポジウムが開催され、先進医療、伝統医療、食事療法、心身医療など多岐にわたる講演が行われた。今号では、シンポジウムの一つ、「東アジアの補完医療」(座長・酒谷薫・日本大学医学部教授 後藤修司・全日本鍼灸学会会長)を詳報しよう。

◆がん患者特有の諸症状に有効性を発揮
慶應義塾大学医学部漢方医学センターの渡辺賢治氏は、時代や社会の変化に対応して進化しているのが漢方医学をふまえて、がん治療における漢方の役割を論じた。

よく知られている抗がん剤・放射線治療の副作用軽減作用やウイルス予防、化学予防(※食品成分と発症の因果関係を調べて予防因子を見つけ出し、積極的な予防に結びつけるアプローチ)に有効性を発揮
転移・再発予防、苦痛軽減などに有効な漢方薬の用い方と効果、十全大補湯や大建中湯など頻用処方について論じ、体力低下、倦怠感、食欲不振、冷え、気分の落ち込みなど、がん患者特有の諸症状に有効性を発揮することを説いた。

◆西洋医学と漢方を大きな二柱にした統合医療をがん研有明病院消化器内科部長の星野恵津夫氏は「漢方で劇的に変わるがん治療」として、統合医療によるがん治療の実



渡辺賢治氏



星野恵津夫氏

第4回ヘルシエイジング学会学術集会開催

ヘルシエイジング学会(山田明夫会長)は、予防医学、加齢による老化の先送り、病的老化の重症化防止、美しく健康的に老いる―などの立場から医薬品、再生医療、医療機器、サプリメント、化粧品等の研究、検証と科学的根拠に基づいた治療の情報提供を目的として、2月17日(金)に東京女子医科大学・早稲田大学連携先端生命科学研究所(福島第一原発)に対する注水作業における被ばく管理の考え方/山口芳裕・杏林大医学部④PS細胞を用いた神経再生疾患・創薬研究岡野栄之・慶応義塾大医学部)と、粗食をテーマにしたワークショップ(座

長・麻生志志・東京医科歯科大学名誉教授、佐中政・江戸川病院、演者・新開省二・東京都健康長寿医療センター、古家大祐・金沢大)が行われた。ランチョンセミナーでは、同学会が福島の原発事故発生直後に同地の作業員に向けて提供し、感謝状を受けた黒酢母発酵液の免疫能活性と放射線防護について、長谷川武夫氏(ルイパストゥール医学研究センター)が講演した。(8面につづ

定した事実)としている。

は統合医療が必然

洋医学と漢方医学を大きなふたつの柱とする統合医療が必要と考察した。◆がんは寒毒―集学的知識、統合的医療は当然
中国医学の立場から論じた中醫クリニック・コタ力院長、東洋医学カン研究所長の小高修司氏は「困難を極めるがん治療では集学的知識と統合的



小高修司氏

な医療体制は当然」と語る。「がんは寒毒」(※冷え、十気血津液が滞り凝り寒毒を有する状態)という中医学の認識とがん幹細胞との関連から「生活習慣病」とし、煎じ薬や散薬の服用に加え、日常生活の改善や経穴への軟膏塗布など患者の自己努力も求めているという。患者や家族が希望を抱けるよう、医療者には「仁恕」(※慈悲深く思いやりがあり罪を許すこと)が不可欠とも言及した。(8面につづ)

コレステロールを考える

第13回FFD健康フォーラム「栄養食品研究会(日本健康食品評価認証機構主催)は、コレステロールをテーマとして、今月から奇数月の第2火曜日(11月は第4)に、お茶の水女子大学(文京区)で5回シリーズをスタートさせた。健康診断などで示される「血清脂質」の数値を適切に理解して食事や生活習慣の改善を図るために、コレステロールの体内動態の基礎知識を確認するの

が狙いだ。お茶の水女子大学公開講座共催、日本臨床栄養協会サプリメントアドバイザー認定講座として開催される。3月13日(日)に開かれた第1回は、「コレステロールが高い方がいいって本当?」のテーマで近藤和雄氏(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授)が講師をつとめた。

◆コレステロール値は高くても大丈夫なのか
近藤氏は、見解が対立している「コレステロール大論争」について解説。日本脂質栄養学会は09年、「コレステロールが高い方がいい」と長生きする。薬を使わずにコレステロールを下げる必要はない」と、これまでの常識を覆す見解を発表した。「コレステロールが高い方が長生き」「女性だけでなく男性も治療不要の場合が多い」としている。

◆大半は薬物治療不要
日本人では、血中の悪玉コレステロール(LDLコレステロール)を分解できない「家族性高コレステロール血症」の重症者(ホモ型)が10万人に1人、軽症者(ヘテロ型)が500人に1人、遺伝的に存在する。ホモ型は難病に指定され、出生後の早期から治療と食事制限が必要な疾患だ。ヘテロ型は、LDL代謝量が健康人より多少劣る程度で、バランスのとれた食事を摂っていれば疾病リスクは低い。「食事からは1日あたり400mg以下が妥当」ということ、近藤氏は「食事からは

400mgまでが妥当」との見解を示した。高脂血症の食事療法のうち、コレステロールの摂取(卵、バター、レバー、鳥皮など)は、1日300g以下に抑えるよう指導されているが、10年版「日本人の食事摂取基準」(厚生省)では、摂取しても問題が起きなかつた量」との見解から男性750mg未満、女性600mg未満に変更された。これについて近藤氏は、「施設などで栄養管理をする際に、この基準値が原則化されるケースがあり、適切ではない」と指摘。体内のコレステロールは、胆汁から分泌されており、400

mg/dayの妥当性を示した(左図)。
グリーンランドのイヌイットとデンマークの白人の食事内容の割合(炭水化物、脂質、たんぱく質)がほぼ同じなのに、心臓病の発症率が前者5・3%に対し後者34・7%と圧倒的に異なる原因について、前者は脂肪・たんぱく質を魚やアザラシで、後者は牛豚肉でそれぞれ摂取補給していたことも紹介した。

コレステロールと疾病リスクとの関係は、明らかになっていない部分もあり、近藤氏は「さまざまな情報を考え併せて食事や生活習慣の改善が必要」と結んだ。(8面)に日本脂質栄養学会刊「長寿のためのコレステロールガイドライン2010」



ナノ技術が素材の効能をさらに活性させます。

独立行政法人産業技術総合研究所と共同で、さまざまな分野で注目されているナノテクノロジーを健康食品分野に応用し、ナノサイズでカプセル化することに成功しました。「飲みやすいサプリ」「少量で済むサプリ」がほしいお客さまのご要望に、私たちはナノ技術でお応えします。

NANO 秋ウコンエキス顆粒
内容量:120g(2g×60包)
希望小売価格¥31,500(税込)

NANO アガリクス菌糸体エキス顆粒
内容量:120g(2g×60包)
希望小売価格¥31,500(税込)

NANO フコイダンエキス顆粒
内容量:120g(2g×60包)
希望小売価格¥42,000(税込)

